

BMC International Winter Climbing Meet 2012 報告

1月23日から28日の6日間、スコットランドで開催されたBMC International Winter Climbing Meet 2012に、日本山岳協会からの派遣という形で、長門敬明と増本亮の2名が参加した。今回のミーティングの感想について記す。

まずはBMC International Winter Climbing Meetの簡単な説明をしたい。簡潔に言えばBMC(英国山岳協議会)主催の国際クライマー交流会。世界各国から2名ずつクライマーを招集し、共に登り、語り合うことで各国クライマーとの交流、技術交換などを行い、さらには各国の山岳協会との繋がりを強固なものにし、アルパインクライミングを普及、発展させようというのが趣旨らしい。流石、BMCといったところ。今回も総勢40名のゲストクライマーと、同等のホストクライマーが集まった。また、この開催にあたり実務、運営ではBMCの人々がクライミングに参加しないで運営を影から支えていることに、BMCの懐の深さを痛感した。

6日間の日程で、毎日クライミングを楽しんだことに疲労を通り越した大きな感動を覚えたのが正直なところ。これから簡単だが日を追って述べていく。まず1/23、24の2日間は、宿泊地のGlenmore Lodgeから車で10分ほどで駐車場、その後は徒歩で1時間の行程、Northern Cairngormsというエリアに行った。2日間のホストは若手で今、もっともイギリスで勢力的クライマーの一人であるウィル・シムというイケメンだった。ウィルはデナリのカシンリッジ最速記録の持ち主で、パタゴニアでもその強さを発揮しているバリバリのクライマーである。増本、長門とも初めてのスコットランドだったので足慣らし程度を想像していたが、最速の男ウィルについていくと初日からルートを2本登るはめになった。ホストがホストだけにちょっと懸念していたが、現実はかなり連れ回された結果となったが、スコットランドを満喫できたのは満足することだった。

よくクライマーの間の噂では日本に近いコンディションの岩場だと言われているが、草付きやブッシュの類いは全くなく、とてもすっきりした綺麗な岩だったのには感激した。特に注目すべきは、このエリアの岩にクラックが多いことだった。また、海が近いスコットランドでは潮風が強く、冬に吹く風は湿り気があり、エビのシッポが岩場全体を覆っているのだ。クラックの中も氷で覆われていることが常だった。日本ではプロテクションに

カムを多用するが、ここではカムが滑って効かないのでナッツやヘキセントリックをピックやハンマーで叩き込むことがよくあった。Northern Cairngormsのスケールは小さい。せいぜい標高差で100mほどである。だが、クラックが発達しているのでルートはいくらでも取れるのだ。トポには所狭しにラインが描かれているのには舌をまく。それにボルトなし、残置物が極端に少ないのは、限りある資源を、妥協のない最小のダメージで抑え、岩場と対等に渡り歩いている証拠のように僕には見えた。また、聞く話では週末にこの岩場だけでも100人はクライマーが集まると言っていた。イギリス人アルパインクライマーの層の厚さに驚くばかりだ。ちなみ初日だけでもBMC International Winter Climbing Meetの参加者だけで、30人は取り付いていた。

実際のクライミングについてだが、とにかく弱点を攻めるのが定石だと思ってしまう僕だが、ウィルは傾斜の強いフェースを選んでた。地元の強みかもしれないが、優しいラインには目もくれずに難しいところを攻める。まったく躊躇することがない。緊張するシーンでも楽しんでさえいたのには驚いた。登り終えると毎回、満面の笑みをこぼしながらクール、クールと言ってはクライミングの恐怖さえ完全に受け入れ、許容した寛容さを披露してくれた。なにかイギリス人クライマーの強さの片鱗を見たようだった。そんなウィルのアックスはグリベルの凄まじく曲がったものだった。僕はペツルのクォークを使っているが、これでもカーブが浅く、傾斜のある壁には不向きだと言われた。よくよく周りを見てみると、ゲストクライマーの登れる人々もペツルのノミックが普通だった。時代は進んでいる。新しいギア、その可能性は実用しないと使えるか、使えないかは分からない。単純なことだが、いろいろな面で刺激を受けた。

登攀を終え夕方6時頃にGlenmore Lodgeへ帰ると、食堂には今日の成果を熱く語る各国のクライマーが食事を共にしていた。英語をあまり話せない我々だったが、根気強く耳を傾けてくれるクライマーとジェスチャーを交えながらクライミングの話で盛り上がった。またGlenmore Lodgeの食事も最高。イギリスの食事情に警戒していたが、かなりしっかりしたディナーになっている。食後はスライドショーで、さらなる満腹を満たしてくれた。寝床につく頃には、ここはクライマーの天国かと思うほどの充実感を抱えていた。

1月25日は生憎の雨。流石にウィンタークライミングは無理なのでスポーツミックスのエリアへ。ケイブの中にはチッピングで作られたドライツリールートがあ

り、傾斜が 130 度以上あるルートを一日中楽しむことが出来た。トラッドで有名な国でも、ボルトがあるところとナチュラルに登る岩場との棲み分けがしっかりしている。要するにトラッドはトラッド、ボルトはボルトである。曖昧な妥協はないようだ。

1月26日は早朝5時出発で Southern Cairngorms の Lochnagar というエリアへ行くことに。この日からはホストも替わり、サイモンさんという中年の強くて登れるクライマー。ここは初日の岩場とは違い比較的長いアプローチ、日本でいったら谷川岳のような位置づけらしい。クライミング自体も長く6ピッチとスコットランドに来て手応えのある登攀を味わえた。ルートはサイモンさんのお勧めで困難性の高いルートを登ることになった。どうやら上部に傾斜のあるフェースが待ち受けている。初めて組むパートナーと分かり合うには、クライミングでロープを結ぶとすぐに見えてくる。サイモンさんと僕も、そう時間のかかることではなかった。午後には相手が何を欲しているのか言葉ではないところで通じ合っていた。日も暮れる前に垂直のフェースを登り終えた者同士で、ガッチリ固い握手を交わせたことに喜びを感じた。

1月27日は念願の Ben Nevis へ行くことになった。またもや早朝5時発で、大勢の移動になり BMC 所有の15人乗りバス3台でドライブ。日が登る頃にアプローチ、今日の目標は新ルートとなった。『お前となら楽しく登れるから、新ルートにいこう。』と、サイモンさんは朝から熱っぽく語った。Ben Nevis は標高が1400mもないイギリス最高峰の山だが、壁は谷川岳や穂高の屏風岩ぐらいのスケールがあり、横幅がある。ちょうど谷川岳の烏帽子岩奥壁を横に3つぐらい並べたワイドさがある。もちろんロングルートも数多くある。僕は、いくつかの資料を読んだことがあったので長大なルートに想いを寄せてはいたが、今回はホストの情熱に付き合うことにした。短い内容のあるラインにチャレンジとなった。核心ピッチはちょっと被ったコーナーとなる。世界的にも強く、偉大で冒険的な記録を打ち出し続けているイギリス人クライマーが育ったこの地で下手なことは出来ない、日本人クライマーの底力を発揮しようと挑んだ。2ピッチの油断ならない登攀後、いよいよ核心のコーナーにさしかかった。慎重にプロテクションを選び、ジリジリ登っていく。初登攀のルートは脆く、先が見えない、いくつかの岩が剥げては落ちそうになる。極小のエッジをつなげてなんとか完登。サイモンさんがセカンドで上がって来たら、最高の笑顔で祝福してくれた。「お前は強いぞ」と言ってくれたが、40歳中盤のあなたも相当な実力だと

思った。スコットランドの底力は計り知れない、長年登り尽くされている Ben Nevis であっても、まだまだ冒険的ラインが残されているのに感慨深かった。ちなみにルート名はイギリス人に馴染みのある日本語で「SAKE、酒」となった。

1月28日の最終日は、Glen Coe というエリアへ。この日は週末の土曜日だったのでクライマーが至る所にいた。やっぱり、スコットランドはクライミングの認知度が日本と違いすぎる。この日も3Pのルートだが印象深いルートを登れた。ヘトヘトになるまで登り倒した6日間の連続登攀は、体の芯まで疲れ果て、だが満足感でいっぱいだった。環境と天気、なによりもパートナーであるホストたちに恵まれた6日間だったし、伝統を崩さないスコットランド精神をクライミングで感じた日々だった。

今回の経験から感じたことは、やはりアルパインクライミングとは創造的な冒険行為ということであった。冒険的行為は先の見えないものだが、最高に楽しいと世界共通の感覚として得たと思う。イギリス人を見ているとその楽しみ方を遥か昔から熟知しているようだった。現在の日本でそれを実践している人や岩場がどれだけいるのだろうか？僕の知る限りでは、ある一部に見えるとしか感じない。スコットランドの岩場では、フィールドに冒険的な意識が垣間見える。ナチュラルなルート、それはパイオニア精神の片鱗を感じさせてくれるもので、今も昔も培ってきた文化であると思う。現在の日本では未知の山、エリアへは興味が薄く、安全で人が集まる安易なところを嗜好しているように見受けられる。山の魅力はそれだけじゃないと僕は感じる。確かに一歩間違えば、生死を分ける境界は至るところにある。だが、着実なステップアップと創造的な姿勢、揺るぎないモチベーションがあれば危険を回避し、有意義に冒険的アルパインクライミングを上昇できる。まだまだ未熟な自分だが、今回得たことをクライミングで実践し発信することで、意識の共有を図りアルパインクライミングの楽しみを少しでも伝えていきたいと感じた。

今回はこのような機会を与えてもらった BMC に感謝と、渡航費などで金銭的な援助と渉外、人選をいいただき感謝の念でつきません。ありがとうございました。

(記 長門敬明)